

出雲コクの誕生と 荒神谷の銅剣

銅剣をシンボルとした出雲人たち

よみがえる輝き

「先生、なんか変なもんが出ました。」
発掘作業をしていた林さんが叫んだ。この「変なもん」こそ、それまでの考古学の常識を覆すことになる三五八本の銅剣の最初の一本だった。

一九八四年夏、出雲平野の南端、斐川町神庭荒神谷で三五八本の銅剣が発見され、その翌年、すぐ近くから銅剣六個と銅矛一六本が見つかった。二〇〇〇年に近い歳月は当時の輝きを隠してはいるものの、その青く鈍いサビの下には、今でもまばゆいばかりの輝きを秘めているのである。その輝きこそ、かつて出雲がもつとも出雲らしさを発揮し、躍動した時代を象徴する輝きであった。

この青銅器が作られていた時代、出雲ではいったいどのようなことが起こっていたのだろうか……。

「銅鐸」「銅矛」時代の終わり

時は今から約二〇〇〇年前、斐伊川の下流域に広がる出雲平野では、二〇ほどのムラに分かれて古代出雲人たちが暮らしていた。しかし、やがて稲作に使う水や土地の所有権をめくり、ムラとムラとの間で抗争がたび重なるようになった。しだいに力の強いムラは弱いムラを併合していき、いつしか出雲平野には二〇のムラが残った。この物語は、出雲平野が一〇のムラのオサたちにより、平和に治められていた時代から始まる。

誕生、出雲人の黄金の神

さっそくカンバの里近くに工房が作られ、銅剣製作技術者（工人）たちが集められた。銅剣の鑄型が作られ、銅と錫や鉛を配合した青銅の合金湯が、鑄型の中に流し込まれる。そして、鑄型から剣の形をした「金属」が取り出される。この金属をさらに神宝たる剣にまで仕上げるには、工人たちがその技術によって魂を吹きこまねばならない。昼夜に及ぶ作業は続いた。

作業が始まって一年が経過した。四〇〇本の銅剣が、朝日の中に照らし出された。ついに作業が初めて、神の分身が作られたのである。

できあがった銅剣は、光に当たると神々しく輝いた。まさしく神の分身と言え、出雲のシンボルにふさわしい輝きに、人びとは恐れ敬い、大地にひれ伏すのであった。

「今日よりわが出雲の地では、この剣をもって神の祭りを行おう。」

カンバのオサは、高らかに号令した。カンバのムラに集まった各ムラのオサたちは銅剣を持ち帰り、新たな神の分身として各ムラの神殿の首座に置いた。

銅剣を祀る儀式は、出雲の各ムラで行われた。同じ銅剣を用いて同じ祭りをする出雲のムラムラの結束は、今まで以上に強固なものとなっていった。出雲のムラを束ねるカンバのオサは、しだいに「王」としての指導力を発揮させていった。こうして、カンバのオサをトップとする「出雲コクが産声を上げたのである。」



出雲平野の南東部に、現在の仏經山のふもとを拠点としたムラがあった。カンバの里現在の斐川町である。今カンバの里では出雲の各ムラのオサたちが集まり、これからの出雲の進む道を相談していた。

この地方のオサたちの首長格である、カンバのオサは言った。

「西現在の九州地方ではクニ同士の戦いが激しくなって、多くの人が死んでおる。それだけじゃない。東の大和、現在の近畿地方のほうでも、戦いは日増しに激しくなっておるよ。」

この時代、日本は一〇〇あまりのクニに分かれ、全国いたるところで抗争の嵐が吹き荒れようとしていた。出雲平野にある小国がこうして嵐の中に巻き込まれる日が来るかもしれない。

へたをすれば、九州や大和の強力なクニに支配されてしまう。そんな危機感が、出雲のムラに広がっていた。これを防ぐためには、ムラ同士のつながりをいっそう強め、

一つのクニとして団結しなくてはならない。出雲の一〇のムラは、今そいつい時期に来ていた。

当時、出雲のムラは、「黄金の神」と呼ばれる青銅製の「銅鐸」や「銅矛」をシンボルにまとまっていた。出雲のムラオサたち



「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「黄金の神」との決別

銅剣を「黄金の神」とすることで出雲コクでは、ムラムラの結束を固め、戦乱の世に巻き込まれずにすんだかに見えた。しかし出雲の平和な時代も、永遠に続くわけではなかった。

出雲コクがひとときの平和を享受するなか、近畿や九州での戦いは、ますます活発な動きを見せはじめていた。

ついに西日本一帯が争乱の世を迎え、それは出雲のすぐそばにまで来ていた。

中国山地を隔てた吉備（現在の岡山県）のクニでは、一人の王が多くのムラを束ね強力な吉備連吉備コクを作り上げていた。

出雲のクニから山を越えた吉備のクニに偵察に行った者が、出雲コクの王に報告した。「吉備のクニでは、ついに隣りのクニと戦いを始めました。」

「大和でも戦いが激しくなつたよ。」
「わがクニも戦いに備えよう。戦はすべし。」
まで来ていた。今以上に結束を強めるべきだ。

ムラオサたちは、口々に叫んだ。彼らは気づいていた。一時は戦乱の嵐の中に巻き込まれることから救ってくれた銅剣だが、

もはや銅剣を黄金の神と崇めてムラムラが結束するだけでは、この危機に立ち向かうことはできない。黄金の神以上に強い「力」で結束しなければ、出雲コクは他国にのりつけられてしまう……。

眠りこく、輝き、そして新たな時代へ

出雲コクの王は、各オサたちに提案した。「すでに銅剣を神の代わりとする時代は終わった。民心をなやませるためには、われわれが「神」にならねばならぬ。」

は、ムラの存亡に関わる問題が生じたときは、いつもこの「黄金の神」のお告げを聞いていた。荘厳な音を響かせる銅鐸、まばゆい輝きを放つ銅矛。古代人にとって初めての金属製品である青銅器が発する音や光は、まさに天上の神から送られてくるものとして、人びとの気持ちを深くとらえていたのであった。

はじめは米の豊作を祈る農耕の祭りに使われた黄金の神だったが、ムラがムラを滅ぼし、クニとしてまとまりを持つにつれ、そのクニのシンボルとして、崇められるようになっていたのである。

しかし、出雲のムラムラが銅鐸や銅矛をシンボルとする時代は、九州や大和での戦乱の様子が伝わってくることで、ついに終りを迎えようとしていた。

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

「そつた、邪悪からわれわれを守ってくれる剣を、出雲のシンボルとして持つてはならないか。」

「そして同じ銅剣を神宝として持つムラが、われわれの連合のあかしとなるのだ。」

「こうして、出雲独特の形をした青銅器の銅剣を作ること、出雲のムラムラの結束のあかしとした。古くから他の地方の文化を受け入れてきた出雲にとって、この銅剣こそ出雲人だけが持つ、クニとしてのシンボル、すなわち「出雲コク」誕生への第一歩であった。」

「われわれは、もつと結束を強めなければならぬ。いつまでも古くから伝わる銅矛や銅鐸を祀るようでは、自分たちがクニとしてまとまることはできない。」

「銅鐸はもとは大和の国のものだし、銅矛は九州のものだ。いつまでもよそから来た神を祀っていいのかわれわれ出雲も、われわれだけの神宝を持つてはならないか。」

